

春山秋山

楠山正雄

むかし、但馬国たじまのくににおまつられになつてゐる出石いずしのおおがみおおがみのお女むすめに、出石少女いずしおとめという大そう美しい女神めがみがお生まれになりました。この少女おとめをいろいろな神様かみさまがお嫁よめにもらおうと思つて争おもいました。けれども少女おとめはお嫁よめに行くことをいやがつて、だれのいうことも聴きこうとはなさいませんでした。

この神かみさまたちの中に、秋山あきやまの下氷男したびおとこと春山はるやまの霞男かすみおとこという兄弟きょうだいの神かみさまがありました。ある日あに兄あにの秋山あきやまの下氷男したびおとこは、弟おとうとの霞男かすみおとこに向かつて、

「わたしはあの少女をお嫁にもraitたいと思つていろ  
ほねに骨を折つてみたが、どうしてもいうことを聴い  
てくれない。どうだ、お前ならもらえと思うか。」

と聞きました。

「わたしなら、わけなくもらつてみせますよ。」

と弟の神が、笑いながらいました。

「ふん、そんならお前とわたしと、どちらが早く少女  
をもらうか競争をしよう。もしわたしが負ければ、  
この着物をぬいでお前に上げよう、そしてわたしの背  
の高さだけの大きなかめに酒をなみなみ盛つて、海山  
のごちそうを一通りそろえて、お客に呼んでやろう。」

といいました。すると霞男かすみおとこはいよいよおもしろ

がつて、

「ようございますとも。そのかわり万まん一いちわたしが負け  
たら、にいさんの代わりかに、わたしがごちそうをしま  
しょう。」

こう約束やくそくをして別わかれました。

おとうと

かみ

弟の神はそれからうちへ帰かえつて、兄神あにがみと賭かけをした

ことをおかあさんに話はなしますと、おかあさんは、

「よしよし、わたしがその賭かけに勝かたせて上げあげよう。」

とおっしゃいました。

おかあさんはそれから、一晚ひとばんのうちにたくさんふじの藤

のつるで、着物きものと袴はかまと、靴くつから靴下くつしたまで織おつて、編あんで、縫ぬつて、その上にやはり藤ふじのつるで、弓ゆみと矢やをこしらえて下くださいました。

おとうと 弟かみの神たいは大そう喜よろこんで、おかあさんのこしらえて下くださった藤ふじづるの着物きものや靴くつを体からだにつけて、藤ふじづるの弓矢ゆみやを手てに持ちました。そして、うきうきうかれながら、野のを越こえ山こを越こえて、少女おとめの家いえへ急いそいで行きました。

いよいよ女神めがみの家いえの前まえまで来きますと、着物きものから靴くつから弓矢ゆみやまで、残のこらず一度どにぱつと紫色むらさきいろの藤ふじの花はなが咲さき出だして、それは絵えにかいたような美しい姿すがたになり

ました。それから弟おとうとの神かみは、藤ふじの花はなの咲さいた弓矢ゆみやを  
少女おとめの居間いまの戸との前まえにたてかけておきますと、少女おとめが  
出でがけにそれを見みつけて、ふしぎに思おもいながら、きれ  
いなものですから、つい手に持もって出ようとしました。  
そのとき弟おとうとの神かみはすかさずそのあとについて行いつて、  
「あなた、どうぞわたしのお嫁よめになつて下ください。」

といいました。少女おとめはびつくりして、ふと自分じぶんに物もの  
をいいかけたものの方ほうをふり向むきますと、そこに目も  
くらむように美うつくしい花はなに飾かざられた若い男神おがみが、気高けだか  
い姿すがたをして立たっていました。少女おとめはすぐ男神おがみのお嫁よめ  
になりました。やがて二人ふたりの間あいだには子供こどもが一人生うま

れました。

二

その後弟のちおとうとの神かみは兄あにの神かみに向かつて、

「いづぞや約束やくそくしたとおり、わたしは少女おとめをお嫁よめにも

らつて、子供こどもまで出来できました。だから約束やくそくのとおり、

あなたの着物きものをぬいで下ください。それからごちそうをた

んとして下ください。」

といいました。

けれども兄神あにがみは弟神おとうとがみの幸福こうふくをねたましく思おもつて、

さもいまいましように、

「そんな約束やくそくはした覚えおぼがないよ。」

といって、まるで着物きものもくれないし、ごちそうもし

ませんでした。

弟おとうと神はくやしがつて、おかあさんの女神めがみの所ところへ

行いつていいつけました。すると女神めがみはおおこりになつ

て、兄神あにがみに、

「あなたはなぜうそをつくのです。神かみのくせにいやし

い人間にんげんのするよううそをつくというのは何事なにごとです。」

としました。

それでも兄神あにがみはやはり約束やくそくを果はたそうとしませんで



した。すると女神はめがみ出石川いずしがわの中の島しまに生はえていた青竹あおだけを切きつて来きて、目の荒あらいかごをこしらえました。そしてその中へ、川の石に塩しおをふりかけて、それを竹たけの葉はに包つつんだものを入いれて、

「この兄神あにがみのようなうそつきは、この竹たけの葉はが青あおくなって、やがてしおれるように、青あおくなって、しおれてしまえ。この塩しおが干ひからびるように干ひからびてしまえ。そしてこの石が沈しずむように沈しずんでしまえ。」

とのろつて、そのかごをかまどの上にのせておきました。

すると兄神あにがみはそのたたりで、それから八年ねんの間干あいだひ

からびて、しおれて、病<sup>や</sup>み疲<sup>つか</sup>れて、さんざん苦<sup>くる</sup>しい目  
にあいました。それですっかり弱<sup>よわ</sup>りきつて、泣<sup>な</sup>き泣<sup>な</sup>き  
おかあさんの女神<sup>めがみ</sup>におわびをしました。

そこでやつと女神<sup>めがみ</sup>がのろいをといっておやりになりま  
すと、兄神<sup>あにがみ</sup>はまたものとおりの丈夫<sup>じょうぶ</sup>な体<sup>からだ</sup>にかえり  
ました。

底本…「日本の諸国物語」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力…鈴木厚司

校正…佳代子

2004年2月19日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、  
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで  
す。